

領域「健康」保育者効力感に影響を与える要因の検討

保育者を対象とした質問紙調査による横断研究

齋藤 めぐみ

The study of factors influencing to the Preschool Teacher Efficacy in Area “Health”
The cross-sectional study by questionnaire survey for Preschool Teachers

Megumi SAITO

キーワード：「健康」保育者効力感 領域「健康」 保育者の資質向上 保育者養成

1. 緒言

乳幼児期は、人間形成の土台作りの年代である。土台が脆ければ崩れやすい。そのため、乳幼児期の教育・保育は人間形成において他のどの年代より大事であり、その果たす役割は大きい。

わが国において乳幼児期の教育・保育の重要性は長い間認知されていなかった。しかしながら、近年急速に幼児教育が注目されはじめている。そのきっかけとなったのは、2011年にジェームズ・J・ヘッグマン博士がノーベル経済学賞を授与されたことであると考えられる。ヘッグマン博士と幼児教育について、汐見(2017)は、以下のように説明している。“ヘッグマン博士は、幼児一人につき1ドルの投資によって、成人期に6~10倍還元されると提唱した。この結論が導き出されるに至った過程にアメリカの貧困層の3~4歳を対象に行った「ペリー就学前プロジェクト」の分析がある。博士は経済効果をもたらした要因として「ペリー就学前プロジェクト」において非認知能力が育成され、その影響が成人にまで及んでいるのではないかと考察した。非認知能力とは、IQや学力で表される認知能力に対して、情動・感情に関連する能力である。例えば、最後までやり抜こうとする忍耐力、気持ちをコントロールできる自信・楽観性、他者を受け入れながら協力できる社会性などの要素があると考えられている。現在教育関連の研究者が様々な研究を行い、非認知能力は主体的な遊びにより育成されるこ

と、原型が5歳頃までに育つとされている大脳変辺縁系や脳幹部と密接に関係している、などの理由からから幼児期からの教育が望ましいと示されている”。

このような背景に基づき、これらを反映させ平成29年3月に保育所保育指針(厚生労働省, 2017)、幼稚園教育要領(文部科学省, 2017)、認定こども園教育・保育要領(内閣府, 2017)が改訂され、平成30年度から施行される。改訂に伴い、保育を行う保育者の資質向上は必至である。

保育者の能力に関連する要因として「保育者効力感」がある。「保育者効力感」は、“保育場面において子どもの発達に望ましい変化をもたらすことができるであろう保育的行為をとることができる信念”と定義される(三木ら, 1998)。

効力感は、心理学者Bandura(1977)の社会的認知理論の中核となる概念のひとつである自己効力感「セルフエフィカシー」に基づく。“目標とする行動をどの程度成功裡に達成出来るかの見込み感”、“ある結果を生み出すために適切な行動を遂行できるという確信の程度”と定義される。

わが国において、「保育者効力感」は、「保育者効力感」尺度(三木ら, 1998)が開発されて以降、様々な研究がなされてきた。例えば三木らは、尺度開発時に、保育先攻の学生を対象に実習前後における保育者効力感を測定し、実習後に学生の保育効力感が高まることを示し

た。神谷(2009)は、保育系の先攻をする学生を対象に大学入学後から4回の実習において縦断的に「保育者効力感」を測定した。その結果、保育者効力感は、途中で低下するが最終的には入学後より高くなることを示した。また田頭(2015)は、保育を先攻する短大1年次、2年次と保育歴6年目までの保育者と「保育者効力感」を比較し、短大1年次が最も得点が高く、保育者が最も低いことを示し、新任保育者への支援の必要性を示唆している。その際、効力感には①全体状況の適切な把握力・対応力、②子どもへの支援・対応力、③変化への対応力の3因子を検出している。保育先攻の学生を対象とした研究では実習の効果を測定したものが多い。

一方、保育者を対象とした研究では、ストレスなどの緩和要因として示されているものが多い。

保育士において「保育者効力感」が一般的疲労、精神的疲労を軽減する要因であること(田中、1999)、バーンアウトを軽減する要因であること(太田、森田ら、2011)などが報告されている。また赤田(2010)は「保育者効力感」は日常いらいだちごとを軽減することを示し、メンタルヘルスの向上に保育士個人の能力への関与が有効であることを示唆している(赤田、2010)。「保育者効力感」を規定する要因を検討し効力感の向上につながる取り組みがストレス軽減を導ける可能性がある。

これらの「保育者効力感」は、保育全般に対する「保育者効力感」である。筆者の知るところでは、2つの領域に限るが、保育内容の領域の援助に特化した「保育者効力感」も研究されている。

西山(2006)は領域「人間関係」に特化した多次元の「保育者効力感」尺度を作成し、5つの因子を示した。

田辺(2011)は保育内容「健康」に特化した「保育者効力感」尺度を作成している。三間(仲間、時間、空間)の喪失による運動能力の低下、社会性の低下、また、こ(孤・個・固・粉・小)食、就寝時間の遅れ、ブルーライトの使用過多等、現代社会において、乳幼児をとりまく健康問題は深刻である。このような乳幼児をとりまく健康の諸問題を背景に、心身ともに健康な子ども

を育むことが保育者の役割としてこれまで以上に求められる。これらの社会的背景から、田辺(2011)は、領域「健康」に特化した保育者効力感の検討が緊急課題であることを指摘し、「健康」に特化した保育者効力感尺度を開発した。

領域「健康」は、健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活をつくり出す力を養うとして幼稚園教育要領、保育所保育指針、こども園教育・保育要領にその内容、ねらい、内容の取扱いが示されている。平成30年度から施行される「幼稚園教育要領2018」に示された「ねらい」と「内容」は以下の通りである。

1 ねらい

- (1) 明るく伸び伸びと行動し充実感を味わう
- (2) 自分の体を十分に動かし進んで運動しようとする
- (3) 健康、安全な生活に必要な習慣や態度を身に付け見通しをもって行動する

2 内容

- (1) 先生や友達と触れ合い、安定感をもって行動する
- (2) いろいろな遊びの中で十分に体を動かす
- (3) 進んで戸外で遊ぶ
- (4) 様々な活動に親しみ、楽しんで取り組む
- (5) 先生や友達と食べることを楽しみ食べ物への興味や関心をもつ
- (6) 健康な生活のリズムを身に付ける
- (7) 身の回りを清潔にし衣服の着脱、食事、排泄などの生活に必要な活動を自分でする
- (8) 幼稚園における生活の仕方を知り自分たちで生活の場を整えながら見通しをもって行動する
- (9) 自分の健康に関心をもち、病気の予防などに必要な活動を進んで行う
- (10) 危険な場所、危険な遊び方、災害時などの行動の仕方が分かり安全に気を付け手行動する

領域「健康」の「保育者効力感尺度」はこれらの内容を基に項目を精選し、妥当性、信頼性が検証された14項目を用いて作成された。尺度開発と同時に田辺(2011)は「健康」保育者

領域「健康」保育者効力感に影響を与える要因の検討

効力感尺度を用いて、対象者の現在の健康に関する生活状況との関連を検討している。その結果、学生と保育歴5年以下の保育者において、生活状況が良好であることと「健康」保育者効力感に有意な相関関係が認められたことを報告している。しかし、「健康」保育者効力感と生活状況以外との関連性は検討されていず、さらなる検討の必要性を言及している。

岩崎(2009)は、「保育者効力感」の測定により、日常の保育で保育者自身が抱えている保育職に対する意識や援助の関わり方を見直すことができ、一層の幼児理解と保育実践のきっかけになる、と述べている。また、田辺(2011)は、「保育者効力感」の尺度開発や関連要因の検討を通して、健やかな子どもを育むために保育者が行うべき保育実践の内容が明らかにされ、その保育実践を遂行するための資質の向上に関連する要因が示されると説明している。

これらのことから「保育者効力感」について検討することは、保育者の資質の向上のために一助になることが考えられる。

以上を鑑み、本研究は保育者を対象として、「健康」に特化した「健康」保育者効力感を測定し、効力感に影響を与える要因について検討することを目的とする。具体的には、「健康」保育者効力感と同時に領域「健康」の理解度、領域「健康」の内容に関連する保育者の日常生活、領域「健康」に基づく子どもの活動の程度を質問紙により測定し、「健康」保育者効力感とこれらとの関連性について検討を行う。

2. 方法

1) 調査対象

千葉県内の公立保育所、幼稚園に勤務する保育者101名を対象とした。

2) 調査期間

平成29年8月4日に実施した。

3) 調査方法

研究者が研修講師として参加した研修会において質問紙を配布し、回答を依頼した。

4) 倫理的配慮

調査にあたり、研修会の主催者に事前に同意を得た。調査は無記名で行うこと、研究目的以外には使用しないことを質問紙に示すとともに質問紙配布時にも説明を行い、同意の得られた者を対象とした。さらに調査の目的や回答方法なども不具合のないように説明した。回答後質問紙は、回答者の1人が代表として回収し、書類袋に封入して研究者に返却された。

5) 調査内容

①フェイスシート

性別、年齢、勤務年数、役職の有無、担当乳幼児の年齢、勤務地の地域性、保育形態について尋ねた。

②領域「健康」の理解度

領域「健康」を十分理解しているかどうかについて、「1：全くそう思わない」「2：そう思わない」「3：あまりそう思わない」「4：どちらともいえない」「5：少しそう思う」「6：そう思う」「7：非常にそう思う」の7件法で回答を求めた。

③「健康」保育者効力感

田辺(2011)の「健康」保育者効力感尺度を用いた。回答は田辺に倣い7件法とした。領域「健康」の内容に沿った「健康」保育者効力感尺度の項目を以下に示す。

- (1) 子どもが友達とかかわることで充実感や満足感を味わえるように保育する
- (2) 子どもが十分に全身を動かし活動意欲もが体を十分に動かし進んで運動するように援助する
- (3) 子どもが戸外で過ごすことの心地よさや楽しさを十分に味わえるように保育する
- (4) 子どもの活動への取り組みの様子を見極め必要に応じて子どもの意欲を喚起するように援助する
- (5) 子どもが食にかかわる体験を積み食に興味をもつように保育する
- (6) 子ども1人ひとりの生活のリズムを把握し、それらに応じながら活動と急速の調和

を図り保育する・保護者に子どもが健康な生活のリズムを身につけることの大切さを伝え家庭での生活の仕方についての理解を促す

- (7) 基本的な生活習慣を子ども自らが望んで行うように援助する・子どもが社会生活上の習慣や態度を身につけることができるように援助する
- (8) 集団での生活で必要とされるきまりや約束の大切さに子どもが気づき自ら守ろうとする態度を育む保育をする
- (9) 子どもの体調の変化に気を配り問題のあった場合には適切に対処する・子どもが危険な場所や危険な遊び方を理解し安全に気をつけて行動できるように保育する
- (10) 子どもが交通安全の習慣や災害時の行動の仕方を理解し身に着けることができるように保育する

④領域「健康」の内容に関連する保育者の日常生活

領域「健康」の内容に関連する保育者の日常生活についての質問項目を作成し、7件法で回答を求めた。質問項目は以下の通りであった。

- (1) 何でもでも話せる友人や家族がいる
- (2) 体を動かすことが好きである
- (3) 戸外での活動が好きである
- (4) 仕事以外に色々な活動に参加する意欲がある
- (5) 食べるのが好きである
- (6) 普段から健康な生活習慣に気をつけ、実践しようとしている
- (7) 普段から身の回りの清潔に気をつけている
- (8) 普段から整理整頓に気をつけている
- (9) 健康に関心をもって、病気予防に努めている
- (10) 危険情報に敏感で、災害に備えて準備をしている

⑤領域「健康」に基づく子どもの活動

- (1) 保育者や友達とふれあい、安定感をもって行動している
- (2) 色々な遊びの中で十分に体を動かしている

- (3) 進んで戸外で遊んでいる
- (4) 様々な活動に親しみ楽しんで取り組んでいる
- (5) 先生や友達と食べることを楽しんでいる
- (6) 健康な生活のリズムを身につけている
- (7) 身の回りを清潔にし、衣服の着脱、食事、排泄などの生活に必要な活動を自分でしている
- (8) 幼稚園における生活の仕方を知り、自分たちで生活の場を整えながら見通しをもって生活している
- (9) 自分の健康に関心をもち病気の予防などに必要な行動を進んで行っている
- (10) 危険な場所、危険な遊び方、災害時などの行動の仕方がわかり、安全に気をつけて行動している

6) 分析方法

「健康」保育者効力感の属性による差異について検討するために、勤務年数区分(15年まで、それ以上)、役職の有無を独立変数、効力感得点を従属変数としてt検定を行った。「健康」保育者効力感と「健康」の内容に関連する保育者自身の日常生活状況、および領域「健康」に基づく子どもの活動状況の関連性を検討するために Pearson の相関分析を行った。分析には、SPSS12.0J(IBM, Japan)を用いた。

3. 結果

1) 対象者の属性

対象者の属性を表1に示す。女性99%、平均年齢は41.6(±13.3)歳、勤務年数は1年から39年、平均勤務年数は13.9(±10.2)年間であった。また、園長、副園長、主任のいずれかの役職者は28名(27.7%)であった。

領域「健康」保育者効力感に影響を与える要因の検討

表1 対象者の属性

		平均値	SD
年齢		41.60	13.25
勤務年数		13.93	10.21
		n	%
性	男性	1	1.0
	女性	100	99.0
勤務年数	～5年	24	23.8
	～10年	25	24.8
	～15年	10	10.1
	15年～	37	36.4
	合計	96	95.0
役職	有	28	27.7
	無	73	72.3
対象児	乳児	35	34.7
	幼児	44	43.6
	その他	14	13.9
	未回答	8	7.9
形態	遊び中心	37	36.6
	遊びと一斉半々	40	39.6
	未回答	24	23.8

2) 領域「健康」の理解度と「健康」保育者効力感との関連性

領域「健康」の理解度の平均は、4.76(SD:0.95)であった。「健康」保育者効力感との関連性として Pearson の相関分析を行ったところ、有意な正の相関関係が認められた($r=0.29$, $p<0.01$)。

3) 「健康」保育者効力感、領域「健康」の内容に関連する保育者の日常生活、領域「健康」に基づく子どもの活動の程度

「健康」保育者効力感、「健康」の内容に基づく保育者の日常生活、および子どもの活動の程度を表2に示した。

ほぼ全ての項目の平均は、5点(そう思う)以上であった。

保育者効力感は、(9)子どもの体調の変化に気を配り問題のあった場合には適切に対処する・子どもが危険な場所や危険な遊び方を理解し安全に気をつけて行動できるように保育する

(3)子どもが戸外で過ごすことの心地よさや楽しさを十分に味わえるように保育する(1)子どもが友達とかかわることで充実感や満足感を味わえるように保育する、の順で点数が高く、(6)子ども1人1人の生活のリズムを把握し、それらに応じながら活動と急速の調和を図り保育する・保護者に子どもが健康な生活のリズムを身につけることの大切さを伝え家庭での生活の仕方についての理解を促す(8)集団での生活で必要とされるきまりや約束の大切さに子どもが気づき自ら守ろうとする態度を育む保育をする(5)子どもが食にかかわる体験を積み食に興味をもつように保育するの順で低かった。

保育者の日常生活は、(5)食べることが好きである(1)何でもでも話せる友人や家族がいる(7)普段から身の回りの清潔に気をつけている、の順で高く、特に(5)と(1)は6点以上で非常に高かった。一方、低かったのは(4)仕事以外に色々な活動に参加する意欲がある(10)危険情報に敏感で、災害に備えて準備をしている(6)普段から健康な生活習慣に気をつけ実践しようとしている、の順であった。(4)“については、4.88(SD:1.33)で特に低かった。

子どもの活動については、(3)進んで戸外で遊んでいる(5)先生や友達と食べることを楽しんでいる(4)様々な活動に親しみ楽しんで取り組んでいる、の順で高く、(9)自分の健康に関心をもち病気の予防などに必要な行動を進んで行っている(8)幼稚園における生活の仕方を知り、自分たちで生活の場を整えながら見通しをもって生活している(10)危険な場所、危険な遊び方、災害時などの行動の仕方がわかり、安全に気をつけて行動している、の順で低かった。

3)「健康」保育者効力感の属性による差異 「健康」保育者効力感の総得点の属性による差異について検討するために、勤務年数区分(15年まで、それ以上)、役職の有無を独立変数、効力感得点を従属変数としてt検定を行った。その結果、本研究の対象者の属性の違いによる「健康」保育者効力感に有意な差異は認められなかった。

研究紀要 第40号

表2 「健康」保育者効力感、領域「健康」の内容に関連する保育者の日常生活、領域「健康」に基づく子どもの活動の程度

		平均値	SD
(1)先生や友達と触れ合い安定感をもって行動する			
保育者効力感1	子どもが友達とかかわることで充実感や満足感を味わえるように保育する	5.71	0.84
保育者の日常生活1	何でも話せる友人や家族がいる	6.03	0.99
子どもの活動1	保育者や友達とふれあい、安定感をもって行動している	5.58	0.66
(2)いろいろな遊びの中で十分に体を動かす			
保育者効力感2	子どもが十分に全身を動かし活動意欲を満足させるように保育する 子どもが体を十分に動かし進んで運動するように援助する	5.48	0.72
保育者の日常生活2	体を動かすことが好きである保育者の生活状況2	5.41	1.23
子どもの活動2	色々な遊びの中で十分に体を動かしている	5.47	0.76
(3)進んで戸外で遊ぶ			
保育者効力感3	子どもが戸外で過ごすことの心地よさや楽しさを十分に味わえるように保育する	5.86	0.84
保育者の日常生活3	戸外での活動が好きである	5.50	1.13
子どもの活動3	進んで戸外で遊んでいる	5.86	0.81
(4)様々な活動に親しみ楽しんで取り組む			
保育者効力感4	子どもの活動への取り組みの様子を見極め必要に応じて子どもの意欲を喚起するように援助する	5.47	0.77
保育者の日常生活4	仕事以外に色々な活動に参加する意欲がある	4.88	1.31
子どもの活動4	様々な活動に親しみ楽しんで取り組んでいる	5.66	0.71
(5)先生や友達と食べることを楽しみ食べ物への興味や関心をもつ			
保育者効力感5	子どもが食にかかわる体験を積み食に興味をもつように保育する	5.45	0.94
保育者の日常生活5	食べることが好きである	6.04	0.91
子どもの活動5	先生や友達と食べることを楽しんでいる	5.70	0.79
(6)健康な生活のリズムを身に付ける			
保育者効力感6	子ども1人1人の生活のリズムを把握し、それらに応じながら活動と急速の調和を図り保育する 保護者に子どもが健康な生活のリズムを身につけることの大切さを伝え家庭での生活の仕方についての理解を促す	5.37	0.85
保育者の日常生活6	普段から健康な生活習慣に気をつけ、実践しようとしている	5.07	1.27
子どもの活動6	健康な生活のリズムを身につけている	5.43	0.82
(7)身の回りを清潔にし衣服の着脱、食事、排泄などの生活に必要な活動を自分でする			
保育者効力感7	基本的な生活習慣を子ども自らが望んで行うように援助する 子どもが社会生活上の習慣や態度を身につけることができるように援助する	5.62	0.79
保育者の日常生活7	普段から身の回りの清潔に気をつけている	5.89	0.80
子どもの活動7	身の回りを清潔にし、衣服の着脱、食事、排泄などの生活に必要な活動を自分でしている	5.29	0.96
(8)幼稚園における生活の仕方を知り、自分たちで生活の場を整えながら見通しをもって行動する			
保育者効力感8	集団での生活で必要とされるきまりや約束の大切さに子どもが気づき自ら守ろうとする態度を育む保育をする	5.41	0.80
保育者の日常生活8	普段から整理整頓に気をつけている	5.22	1.01
子どもの活動8	幼稚園における生活の仕方を知り、自分たちで生活の場を整えながら見通しをもって生活している	5.04	0.81
(9)自分の健康に関心をもち病気の予防などに必要な活動を自分で行う			
保育者効力感9	子どもの体調の変化に気を配り問題のあった場合には適切に対処する 子どもが危険な場所や危険な遊び方を理解し安全に気をつけて行動できるように保育する	5.94	0.79
保育者の日常生活9	健康に関心をもって、病気予防に努めている	5.27	1.11
子どもの活動9	自分の健康に関心をもち病気の予防などに必要な行動を進んで行っている	4.95	1.00
(10)危険な場所、危険な遊び方、災害時などの行動の仕方が分かり、安全に気をつけて行動する			
保育者効力感10	子どもが交通安全の習慣や災害時の行動の仕方を理解し身に着けることができるように保育する	5.64	0.78
保育者の日常生活10	危険情報に敏感で、災害に備えて準備をしている	4.89	1.12
子どもの活動10	危険な場所、危険な遊び方、災害時などの行動の仕方がわかり、安全に気をつけて行動している	5.13	1.06

領域「健康」保育者効力感に影響を与える要因の検討

4) 領域「健康」保育者効力感、領域「健康」の内容に関連する保育者の日常生活、領域「健康」に基づく子どもの活動の関連性

領域「健康」保育者効力感、領域「健康」の内容に関連する保育者の日常生活、領域「健康」に基づく子どもの活動の関連性を分析するために、内容ごとに Pearson の相関分析を行い、表3に示した。

領域「健康」保育者効力感と領域「健康」に関連する保育者の日常生活、子どもの活動について以下の6項目について正の有意な相関、または相関傾向が認められた。

①内容(2) いろいろな遊びの中で十分に体を動かす：“子どもが十分に全身を動かし活動意欲を満足させるように保育する・子どもが体を十分に動かし進んで運動するように援助する”と保育者の日常生活“体を動かすことが好きである”(r=.18)、子どもの活動“色々な遊びの中で十分に体を動かしている”(r=.17)

②内容(4) 様々な活動に親しみ、楽しんで取り組む：“子どもの活動への取り組みの様子を見極め必要に応じて子どもの意欲を喚起するように援助する”と保育者の日常生活“仕事以外に色々な活動に参加する意欲がある”(r=.25)

③内容(5) 先生や友達と食べることを楽しみ食べ物への興味や関心をもつ：“子どもが食にかかわる体験を積み食に興味をもつように保育する”と保育者の日常生活“食べるのが好きである”(r=.27)

④内容(6) 健康な生活のリズムを身に付ける：“子ども1人1人の生活のリズムを把握し、それらに応じながら活動と急速の調和を図り保育する・保護者に子どもが健康な生活のリズムを身につけることの大切さを伝え家庭での生活の仕方についての理解を促す”と保育者の日常生活“普段から健康な生活習慣に気をつけ、実践しようとしている”(r=.22)

⑤内容(7) 身の回りを清潔にし、衣服の着脱、食事、排泄などの生活に必要な活動を自分でする：“基本的な生活習慣を子ども自らが望んで行うように援助する・子どもが社会生活上の習慣や態度を身につけることができるように援助する”と保育者の日常生活“普段から身の回り

表3 「健康」保育者効力感、保育者の日常生活、子どもの活動の関連

	保育者効力感1	保育者の日常生活1	子どもの活動1
保育者効力感1			
保育者の日常生活1	0.167		
子どもの活動状態1	0.130	0.313 **	
	保育者効力感2	保育者の生活状況2	子どもの活動2
保育者効力感2			
保育者の日常生活2	0.181 †		
子どもの活動状態2	0.170 †	0.140	
	保育者効力感3	保育者の生活状況3	子どもの活動3
保育者効力感3			
保育者の日常生活3	0.006		
子どもの活動状態3	0.098	0.115	
	保育者効力感4	保育者の生活状況4	子どもの活動4
保育者効力感4			
保育者の日常生活4	0.247 **		
子どもの活動状態4	0.128	0.174 †	
	保育者効力感5	保育者の生活状況5	子どもの活動5
保育者効力感5			
保育者の日常生活5	0.274 **		
子どもの活動状態5	0.070	0.154	
	保育者効力感6	保育者の生活状況6	子どもの活動6
保育者効力感6			
保育者の日常生活6	0.218 *		
子どもの活動状態6	0.163	0.281 **	
	保育者効力感7	保育者の生活状況7	子どもの活動7
保育者効力感7			
保育者の日常生活7	0.225 *		
子どもの活動状態7	0.074	0.176 †	
	保育者効力感8	保育者の生活状況8	子どもの活動8
保育者効力感8			
保育者の日常生活8	0.133		
子どもの活動状態8	0.057	0.164	
	保育者効力感9	保育者の生活状況9	子どもの活動9
保育者効力感9			
保育者の日常生活9	0.134		
子どもの活動状態9	0.187 †	0.279 **	
	保育者効力感10	保育者の生活状況10	子どもの活動10
保育者効力感10			
保育者の日常生活10	0.109		
子どもの活動状態10	-0.042	0.304 **	

の清潔に気をつけている”(r=.24)

⑥内容(9) 自分の健康に関心をもち病気の予防などに必要な活動を進んで行う：“子どもの体調の変化に気を配り問題のあった場合には適切に対処する・子どもが危険な場所や危険な遊び方を理解し安全に気をつけて行動できるように保育する”と子どもの活動“自分の健康に関心をもち病気の予防などに必要な行動を進んで行っている”(r=.19)

「健康」保育者効力感と保育者の日常生活に関連が認められ、かつ、保育者の日常生活と子どもの活動に正の相関が認められた項目は、以

下の2項目であった。

①内容(4) 様々な活動に親しみ楽しんで取り組む：保育者の日常生活“仕事以外に色々な活動に参加する意欲がある”と子どもの活動“様々な活動に親しみ楽しんで取り組んでいる”($r=.17$)

②内容(6) 健康な生活のリズムを身に付ける：保育者の日常生活“普段から健康な生活習慣に気をつけ、実践しようとしている”と子どもの活動“健康な生活のリズムを身につけている”($r=.28$)

「健康」保育者効力感とは関連性が認められず、保育者の日常生活と子どもの活動に弱い正の相関が認められた項目は、以下の4項目であった。

①内容(1) 先生や友達と触れ合い、安定感をもって行動する：保育者の日常生活“何でも話せる友人や家族がいる”と子どもの活動“保育者や友達とふれあい、安定感をもって行動している”($r=.31$)

②内容(7) 身の回りを清潔にし、衣服の着脱、食事、排泄などの生活に必要な活動を自分でする：保育者の日常生活“普段から身の回りの清潔に気をつけている”と子どもの活動“身の回りを清潔にし、衣服の着脱、食事、排泄などの生活に必要な活動を自分でしている”($r=.19$)

③内容(9) 自分の健康に関心をもち病気の予防などに必要な活動を進んで行う：保育者の日常生活“健康に関心をもって、病気予防に努めている”と子どもの活動“自分の健康に関心をもち病気の予防などに必要な行動を進んでいる”($r=.28$)

④内容(10) 危険な場所、危険な遊び方、災害時などの行動の仕方が分かり、安全に気を付けて行動する：保育者の日常生活“危険情報に敏感で、災害に備えて準備をしている”と子どもの活動“危険な場所、危険な遊び方、災害時などの行動の仕方がわかり、安全に気を付けて行動している”($r=.30$)

なお、内容(3) 進んで戸外で遊ぶ(8) 幼稚園における生活の仕方を知り、自分たちで生活の場を整えながら見通しをもって行動する(10) 危険な場所、危険な遊び方、災害時など

の行動の仕方が分かり、安全に気を付けて行動する、については、効力感、保育者の日常生活、子どもの活動間に関連性は認められなかった。

4. 考察

本研究は、保育者を対象として、領域「健康」に特化した領域「健康」保育者効力感を測定し、効力感に影響を与える要因について検討することを目的とした。具体的には、領域「健康」保育者効力感の属性による差異、領域「健康」保育者効力感と領域「健康」の理解度、領域「健康」の内容に関連する保育者の日常生活、領域「健康」に基づく子どもの活動の程度との関連性について検討を行った。

まず、属性による領域「健康」保育者効力感について述べる。本研究では領域「健康」保育者効力感の経験年数や役職の有無に差異は認められず、経験年数や役職は領域「健康」保育者効力感に影響を及ぼさないということが示唆された。田辺(2011)の研究では、新任の保育者の保育者効力感が低いという結果であり本研究の結果とは異なる。本研究では経験年数による差異を5年までと5年以上で区切るには人数の不均衡がみられたため中央値の15年で区切った。そのために異なった結果であった可能性がある。

次に、領域「健康」保育者効力感と他項目との関連性について述べる。領域「健康」の理解度との関連性が認められ、領域「健康」の理解を深めることが効力感の向上につながる可能性が示唆された。西山(2009)は、領域「人間関係」の保育者効力感の向上のために保育者支援プログラムを実施し、領域「人間関係」保育者効力感の向上に有効であることを報告している。今後、領域「健康」についても保育者対象の研修プログラムを作成し実施することが保育者の効力感を向上させ、さらにそのことが資質の向上につながると考えられる。また、保育者養成校としてはこの結果をふまえ、領域「健康」保育者効力感の向上を目指した授業を展開することが望まれる。

領域「健康」保育者効力感に影響を与える要因の検討

領域「健康」保育者効力感、領域「健康」に関連する保育者の日常生活、子どもの活動について、関連性について、いくつかの項目間で関連性が認められた。整理すると以下の5パターンに分けられる。(図1)

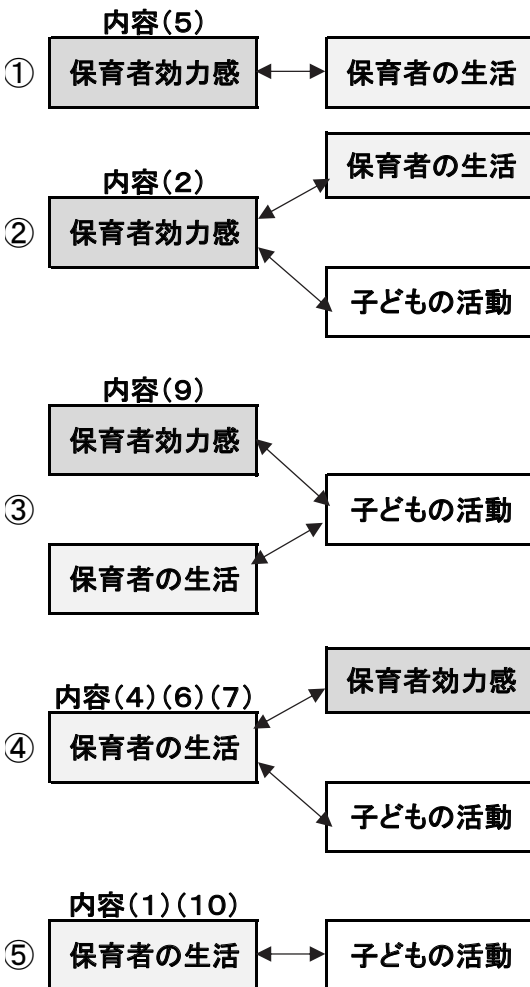


図1 項目間の関連性パターン

領域「健康」の内容10項目のうち、5項目において領域「健康」保育者効力感と領域「健康」に関連する保育者の生活と関連性が認められたことがわかる。また、2項目において子どもの活動との関連性が認められ、そのうち1項目は領域「健康」保育者効力感と保育者の生活も同時に関連性が認められている。一方で保育者の日常生活は効力感とは関連せずに子どもの活動

状況とだけ関連性が認められている項目が6項目あった。これらのことから領域「健康」保育者効力感は、保育者の日常生活から影響を受ける可能性があると考えられる。しかし領域「健康」保育者効力感が子どもの活動に影響を与えるかどうか本研究では明確にはされなかった。保育者の領域「健康」関連の日常生活が領域「健康」保育者効力感と関連があるということについて、領域「健康」保育者効力感が対象者の現在の健康に関する生活状況と関連していることを示した田辺(2011)の研究と似た結果となった。田辺の調査項目は、夜、よく眠ることができる、起床・就寝時間が規則的であるなど健康な生活習慣関連の項目であった。本研究は、領域「健康」の内容に関連した調査項目であったが、いずれも保育者の健康的な生活と関連があるといえる。

以上より、領域「健康」保育者効力感に影響を与える要因として、保育者の健康的な日常生活がそのひとつである可能性が示唆された。

領域「健康」保育者効力感の向上のために保育者の領域「健康」に関連する日常生活を振り返り修正することはひとつの方法である。今後、領域「健康」保育者効力感の向上のための研修プログラムや保育者養成校の授業において保育者が健康的な日常生活を送ることができるような内容を検討することが望まれる。

最後に本研究の限界点について述べる。まず、調査時点で乳児を担当する保育者も調査対象者としたことである。本研究の質問項目としての領域「健康」は、幼児を対象としたものであった。そのため、領域「健康」保育者効力感や子どもの活動について現在の状況から回答できなかった者も含まれていたことが考えられる。また、領域「健康」関連の保育者の生活状況の質問項目について信頼係数などを算出していない。さらに、領域「健康」の内容ごとの項目での関連性を検討する方法は、尺度の作成者である田辺は提示しておらず筆者独自の解析方法であった。そのため、今後は研究対象者について、現在幼児を担当している保育者と限定して行うこと、領域「健康」関連の保育者の生活状況の質問項目を精査すること、解析方法を検討する必要がある。

5. 展望

西山(2009)が「人間関係」保育者効力感の向上を目指した保育者対象の研修プログラムは、効力感の考えの基となっている Bandura (1977) の社会的認知理論の主要概念「自己効力感」に基づいている。Bandura によると自己効力感は、4つの情報源から影響を受けると提唱されている。すなわち①遂行行動の達成、②代理的体験、③言語的説得、④生理的・情動的喚起、である。①は、目標の行動に対して個人の成功・失敗体験、②は他者が行う目標行動の観察、③は目標行動に関連する言語的情報の獲得、④は目標行動からの身体的・感情的変化の気づきである(竹中、2008)。この概念を用いた実際の介入としてはセルフモニタリングなどを行いながら、対象者が必要な情報を獲得しつつ目標行動を目指す。

今後、このような要素を含め領域「健康」保育者効力感の向上のための保育者向け研修プログラムや授業を検討すること、実施後の効果について検証すること、その際保育者の健康関連日常生活について検討することが望まれる。

6. 引用文献

- 赤田太郎(2010) 保育士ストレス評定尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 心理学研究 81(2) 158 - 166
- Bandura.A.(1977) Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change, Psychol Rev, 84 191-125
- 岩崎桂子(2009) 保育者効力感研究の現状と課題 小池学園研究紀要 4 77-85
- 神谷 哲司(2009) 保育者養成系短期大学生の保育者効力感の縦断的变化: 実習時期と就職活動を通じた進路選択過程に着目して キャリア教育研究 28(1), 9-17
- 三木知子, 桜井茂男(1998) 保育専攻短大生の保育者効力感に及ぼす教育実習の影響 教育心理学研究 46 (2) 203-211
- 森田多美子・植村勝彦(2011) 保育所に勤務する保育士のバーンアウトに影響を及ぼす要因の

- 検討 愛知淑徳大学論集 心理学部篇 1 67-81
- 無藤隆(2015) 生涯の学びを支える 非認知能力をどう育てるか これからの幼児教育 18-21 ベネッセ教育総合研究所
- 西山修(2009) 保育効力感と自我同一性の形成—領域「人間関係」について—東京 風間書房
- 西山修(2011)「幼児の人とかかわる力を育むための多次元保育者効力感尺度の作成」日本保育学会誌『保育学研究』44(2)150-160
- 太田 祐貴子(2016) 保護者対応と保育士のバーンアウト: 看護師との比較から お茶の水女子大学心理臨床相談センター紀要 18 1-11
- 汐見稔幸(2017) 新指針・要領改定の背景日本編 どこへ向かう? 日本の保育・幼児教育 33-46「さあ、子どもたちの「未来」を話しませんか」小学館 東京
- 竹中晃二(2008) 行動変容 健康行動の開始・継続を促すしかけづくり 健康・体力づくり事業団
- 田中 昭夫(2002) 保育者の蓄積的疲労徴候を過重にする要因・軽減する要因 保育学研究 40(2) 212-218
- 田頭 伸子(2016) 保育者効力感の発達的变化について: 保育専攻短大生と保育者の比較 広島文化学園短期大学紀要 (49), 29-33
- 田辺昌吾(2011) 心身ともに健康な子どもを育むための保育者の資質について —「健康」保育者効力感からの検討— 四天王寺大学紀要 51175-185

7. 謝辞

調査にご協力くださいました保育所、こども園、幼稚園の先生方に記してお礼申し上げます。